影舞（かげまい）

睦月影郎
Kagero Mutsuki

講談社文庫

講談社文庫

影舞（かげまい）

睦月影郎

講談社

|著者| 睦月影郎　1956年神奈川県横須賀市生まれ。県立三崎高校卒業。23歳で官能作家デビュー。熟女もの少女ものにかかわらず、匂いのあるフェチックな作風を得意とする。著書は400冊を突破。近刊に『肌褥(はだしとね)』、『姫遊(ひめなそび)』、「平成好色一代男」シリーズ、『Gのカンバス』（以上、講談社文庫）、『欲情の文法』（星海社新書）、『キネマ館多情』（徳間文庫）、『妖女の棲む家』（竹書房ラブロマン文庫）、『双子くノ一』（二見文庫）、『つくもがみ蜜乱』（コスミック文庫）、『蜜仕置』（祥伝社文庫）、『みだらくずし』（学研M文庫）、『淫ら花』（廣済堂文庫）、『プレイバック性春』（双葉文庫）などがある。

影舞(かげまい)
睦月影郎(むつきかげろう)
© Kagero Mutsuki 2014

講談社文庫
定価はカバーに
表示してあります

2014年1月15日第1刷発行

発行者——鈴木　哲
発行所——株式会社　講談社
東京都文京区音羽2-12-21　〒112-8001
電話 出版部（03）5395-3510
　　販売部（03）5395-5817
　　業務部（03）5395-3615
Printed in Japan

デザイン—菊地信義
本文データ制作—講談社デジタル製作部
印刷———豊国印刷株式会社
製本———株式会社大進堂

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務部あてにお送りください。送料は小社負担にてお取替えします。なお、この本の内容についてのお問い合わせは講談社文庫出版部あてにお願いいたします。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することはたとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-277749-0

目次

第一章　秘められし力の目覚め　七
第二章　柔肌の匂いに魅せられ　四八
第三章　恋に熱く疼く生娘の胸　八九
第四章　清らかな蜜にまみれて　一三〇
第五章　混じり合う二人分の蜜　一七一
第六章　快楽の日々よいつまで　二一二

講談社文庫

影舞（かげまい）

睦月影郎

講談社

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

第一章　秘められし力の目覚め　七
第二章　柔肌の匂いに魅せられ　四八
第三章　恋に熱く疼く生娘の胸　八九
第四章　清らかな蜜にまみれて　一三〇
第五章　混じり合う二人分の蜜　一七一
第六章　快楽の日々よいつまで　二二

影舞（かげまい）

第一章　秘められし力の目覚め

一

「すっかり良くなって、本当に良かったわ」

「ええ、皆様のおかげです。これからうんと働いて恩返ししないと」

美根が笑顔で言い、与二郎も荷を背負いながら、彼女の顔を眩しげに見て答えた。

ほぼ三月、寝たきりであったのが、ようやく体力も回復し、このように千住から浅草ぐらいなら歩けるようになったのだ。

梅の蕾も綻び、風も徐々に春の香りを運びはじめていた。

大きな荷は、浅草の下駄屋から預かった杉や桐の木片だ。それを美根と分けて背負っている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

これで下駄を作り、また店へと持ってゆくのだ。

吉崎美根は十七歳、千住に住む御家人の一人娘である。

父親の正之助は、小普請方だが、何しろ形ばかりの役職で扶持も少なく、それで下駄作りの内職を、妻の弓枝、娘の美根と三人で行なっていた。

与二郎は、昨秋の嵐のあと、隅田川の川岸に打ち上げられているところを正之助に救われ、一家の手厚い看護を受けて息を吹き返した。

全身は、増水した川を流れる木などによる切り傷が無数にあったが、どれも浅いものばかりで、しかも流木が脾腹にでも当たって仮死状態になったか、水もそれほど飲んでいなかった。

着の身着のままで、元結いも解けて髪はザンバラ。何も持っているものはなく、百姓か町人かも分からなかった。

与二郎が意識を取り戻したのは、発見されてから半月ほど経ってからだ。

気を失いながらも、水や粥は口にしていたようで、いったん気がつくと回復は早かった。

しかし、彼は一切の記憶を失っていたのである。

辛うじて覚えているのは与二郎という名のみ、歳も二十歳少し前と思われた。

立って歩けるようになると、与二郎は下駄作りを手伝い、たいそう器用なので正之助たちを驚かせたものだ。

拝領の御家人屋敷と言っても、あばら屋に等しく、間数も三つ。あとは厨に厠、納戸と、小さな庭では季節の花を栽培して売りに出る。

与二郎は、年頃の娘もいるからと遠慮し、回復してからは庭の小さな納屋で寝起きしていた。

下駄作りは、四十歳になる正之助が浅草の下駄屋から取ってきた仕事だ。

下駄には、一枚の木で作る通称くりぬきと言われる連歯。そして歯を別に作って嵌め込む差し歯下駄があり、注文に応じてその両方を作り、ときに歯の差し替えなども行なっていた。

形を作って磨いてから、三つの眼を錐で開け、弓枝や美根が鼻緒を挿げる。

朴歯が高く、雨上がりの泥濘などに重宝される足駄や、男女ともに使える一般的な駒下駄など、一家は仕事が丁寧で早いので注文も数多く、まずまずの実入りになっていた。

与二郎も、何度か正之助と一緒に浅草の下駄屋に出向いていたが、今日は美根と一緒だった。

正之助は珍しく登城し、何やら寄り合いがあるとかで帰りは明日になるようだ。
美根は笑窪と八重歯の愛らしい娘で、甲斐甲斐しく彼の看護をしてきたから、すっかり打ち解けていた。
一人っ子のため、与二郎を兄のように思っているのか、あるいは男女の恋の芽生えなのか、二人きりの時はとみに親しげにしてきた。
しかし、与二郎にとっては恩人の一人娘なので、適度な距離を置いて控えめに接していた。
今日は浅草へ行き、真っ直ぐ千住へ戻るところだった。
だいぶ日も傾き、夕風が冷たくなってきた。
（うん？　尾けられている……？）
与二郎は、ふと思った。
先日も、正之助と外出したときに、そう感じたものだった。
もちろん振り返って周囲を見回すようなことはしない。なぜか意識せずとも、本能が彼を操っているようだ。
あるいは、無宿人が御家人の家に居候しているという噂でも立ったのだろうか。
浅草の下駄屋では正之助も、近所の手伝いという紹介しかしていない。

与二郎は、正之助に借りた着物に、総髪を元結いで縛り、垂らしているだけだ。見ようによっては、美根に従う小者（こもの）という感じだろう。

正之助も弓枝も、彼の記憶が戻るまでは吉崎家に置いてくれるようで、特に役人になどは届け出ていない。

尾行されるような覚えはなく、まして彼を不審に思う役人ならば、隠れたりせず正面から詰問してくるだろう。

と、人家が切れ、寂しげな堤に差し掛かった。

この辺りで、浅草から戻る正之助が、打ち上げられている与二郎を見つけたのだ。

記憶が戻らないのがもどかしく、与二郎は夕風に吹かれながら河原を見回した。

すると、二人連れの侍がこちらに歩いてくるのが見えた。足取りがふらついているので、早くから飲んでほろ酔いなのだろう。

「おう、御家人の娘か。ちょうど良い。付き合うてくれ」

「なあに、少し酌をするだけだ。男、女の荷を背負うて早々に立ち去れ」

二人は、若い娘と見るなりこちらに駆け寄って言った。

美根は青ざめ、与二郎も危険を察して彼女の荷を解いて自分が持った。

「どうか、一人でお逃げ下さい」

与二郎が早口に囁いたときには、連中は薄笑いを浮かべながら、挟み撃ちするように左右から迫ってきた。

「男、早く行けと申したであろうに、刀の錆にされたいか」

一人の大柄な男が言う。

二人とも二十歳前後、華美な着物と袴で身を包んでいるが、それぞれに筋骨逞しく剣術自慢のようだ。

「お、お許し下さいませ。日が落ちる前に帰らねばなりません」

「ええい、うるさい！」

与二郎が美根を庇いながら言ったが、たちまち大柄な男に突き飛ばされ、与二郎はひとたまりもなく二つの荷とともに倒れ込んだ。

美根は、与二郎を心配しながらも、言われたとおり駆け出そうとしたが、回り込んだもう一人に抱きすくめられていた。

「無体な……。お止め下さい……！」

美根がもがくと、かえって男たちの嗜虐欲を煽ったようで、どうやらこの場で手込めにする気になったか彼女を草に押し倒した。

周囲は誰も通らぬ寂しい場所だが、と、もう一人、通りかかる女がいた。

やはり二十歳前で、使いの帰りらしい大店（おおだな）の奉公人というところだろうか。
その女にも、もう一人がいち早く気づき、駆け寄って羽交い締めにした。
「見られたら仕方がない。ちょうど美形の女が二人とは好都合」
「アアッ……！」
女の悲鳴が響き、半身起こした与二郎はビクリと身を強ばらせた。
（前にも、このような……）
彼は思いながら、荷を解いて下ろし、身軽になって立ち上がった。
草むらの二ヵ所で、美根と女が組み伏せられている。
与二郎はその一方に飛びかかり、襟首と帯を摑（つか）み渾身（こんしん）の力で引き離した。
「こ、こやつ……、うわ……！」
投げつけられ、一回転した武士が肩から落ちて声を上げた。
「貴様、天下の旗本に刃向かう気か！」
もう一人が気づいて立ち上がり、いきなり抜刀してきた。
しかし、刀が斬り下ろされる寸前に与二郎は横へ飛び退きざま、爪先を男の脾腹にめり込ませていた。
「むぐ……！」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com